

第8回研究会より

参加者 7人+森田智幸（山形大学講師）先生



1 保科さんのプロデュース

（1）富山市立奥田小学校に平成20年行ったときのシンポジウムについてご紹介してくれました。

シンポジスト・・・佐藤学、庄司康、小畑公志郎先生

・質の高い学びについて

- 教室全体の一体感ではない、教室内の様々な個性を
- 「アンサンブル（同じ金管のみとか）」ではなく、「オーケストラ」へ
- ・今の教科書は、どの教師も使える＝低水準に合わせて作られている
- ジャンプの課題をどう作っていくか＝教師のレベル
- ・出来ない子ほど、ジャンプを求めている
- 真面目に努力ではなく、夢中になること

（2）次に芦屋市朝日が丘小学校（H24年2月14日）の発表会がなされました。

助言者 今宮信吾先生（関西大学初等部教諭）

5年国語 みんなで話し合っ、考えを深めよう

- ・パネルディスカッション・・・意見の差がないと成立しない
- ・目に見えるものがないと単なる空中戦になる
- Thinking tool・・・Xチャート、ペン図、熊手図

議論になったこと

Q ジャンプの課題って？

→ひとりではできない課題

子どもが持つ課題から生まれるときもある

国語では、読みが深まっていくこともジャンプの課題ではないか。何も課題解決だけがジャンプの課題ではないであろう。

数学や理科では、生活経験を、一般概念で考えるようなものが、ジャンプの課題には多いようだ。

社会では、たとえば、タイの多妻について、おかしいと考える。それに対して、どうしておかしいと思うのか、その点の賛成と反対の根拠をあげて立場を表明するのもジャンプの課題と言えると思う。

→国語はテキストにもどれるが、社会は資料にもどれない、算数は、子どもたちからの課題はでにくいのではないかな？

→歴史の授業で、「武士から太政大臣になった人は失敗する」という発言があった。「武士から武士」は成功しやすいという意見。時代を超えて、検証することはできるかもしれない。

→佐藤学先生は、「どうして小学校は、国語を研究テーマにするのだろう」と言っていた。算数や理科の方が、ジャンプの課題としてはやりやすい。

→昭和20年代の数学の方が今よりもはるかにレベルが高かった。今、よく穴埋めを作って証明を考えさせる授業があるが、大変問題だ。

※結局の所、学びで哲学的背景がないから。目指すべきビジョンが今の教育現場には書けている。

(3) 石井順治先生の講演会の音を聞いて、参加者一同と意見を交わしました。

算数 分数と通分

- ・教科書出して、○ページ読んで・・・子どもにとって一番つまらない授業
- ・教師の居方・・・子どもに話しかけないほうがいい。4人がつながっているのに教師が入るとそのつながりを切ることになる。じっと耳を傾けてキャッチする
- ・「いかにわかりやすく説明するか、教えるか」という教師力を磨いてきた。しかし、学び合いの授業をしていくには、「子どもが発見していく」「子どもが学び合って見つけていく」に早くわかれば良いというものではない。

教師の居方について話し合いがなされました。

Q 教師の居方というのだが、どんどんアドバイスする居方についてどう思うか？

→教科によって居方が違うのではないかな

→石井順治先生の講演から：「早くわからせようとしすぎ」＝失敗の授業の大切さを教師自身がわからないといけない。

→教えなくてはならないというのなら、前もってプリントにすればいいこと。そ

の時間に費やすよりも、探求することに費やせばいいと思うのだが、現場の教師はプリントにすればいいこともくどくど話すのは不思議だ。

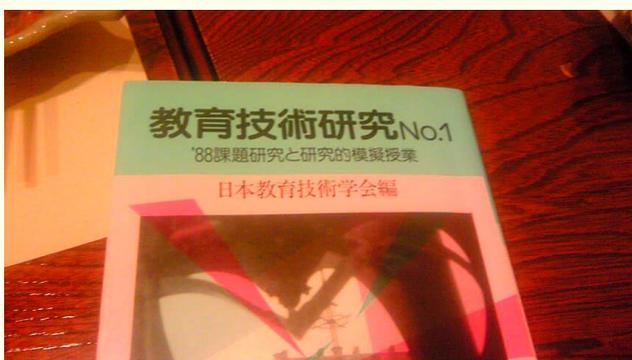
→佐藤学先生は「共に生きる：物語として組み立てよう」と言っていた。“学びのストーリー”を読み取ることが研究では大切。

参加者の意見交換ができて、大変勉強になりました。

2 丹さんプロデュース 2 回目

前回は途中で終了してしまったので、丹さんをお願いして、続きもみなさんで参加しました。

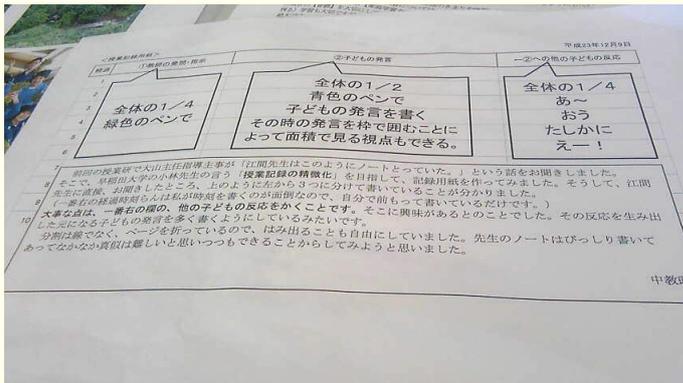
今回は、授業を参観しているときの記録の方法について、山大の江間教授の記録についてご紹介があった後に、参加者全員で自分の方法について紹介しあいました。記録をとることで、授業を味わいにくくなることや、千葉さんは江間研にいたときは、とにかくひたすら記録し続けることを訓練されたことなど、参加者の体験がさまざまでした。森田先生の記録についてもご紹介いただきました。佐藤学研では、子どもの事実ストーリーをつけていくことを学んだというお話でした。田中さんは、大学の時ゼミの先生が進めてくれた本があり、その先生は途中亡くなってしまったが、今その本を大切にもっているということでした。



『教育技術研究 NO1』でした。石井邦男さんも編集に進化しています。

※授業をことばで起こしておこうという研究が名古屋大から始まった。授業を根拠をもって分析するために。

本会の終了後に懇親会の席にもってきてくれました。



授業記録については、個人ごとの形式でよいのではないかと、あまり形式を固定すると、むしろ授業が見えなくなるなどの話になりました。個人研究を積む必要があるようです。またいつか、議論したい内容です。

授業カンファレンス

小学1年 たのしくつかおう かんじのはなし

H20年に保科さんが、初めて1年生を受け持った時の授業でした。このビデオを今回はカンファレンスしました。

T:「はい、じゃあ、新しいまた漢字の勉強をしますけれども、なんかこんなものが届いていました。」

封筒を見せる

C n 「ちょう・せん・じょう」

C 2 「保科先生書いた。お見通しだもん」

T:「じゃあ中を空けてください」

C n 「コナンだ。」「コナンだ。」「コナンだ。」

封筒の中には、漢字“休”“体”とアニメ『名探偵コナン』のイラストが書いてある。

T 「こないだのと同じ挑戦状ですか？」

C n 「同じ」「同じ」

T 「じゃあ、なんて書いてあるか読んでみよう」

C n 「きみは、このかんじの ひみつを とくことが できるかな」

声に出して斉唱

T 「きみは、このかんじの ひみつを とくことが できるかな。とういこと

で、下に2つの漢字が出ています。見たことがある？」

大きな紙に“休”“体”を書いてある。それを見せながら

C1「なんか、“き”が書いてある」

T「き？」

C1「きとカナカナのイみたいなの……。あと反対のは、習って泣けど“ほん”という字がある。」

T「習っていないけど“ほん”という字がある？」

T「どこに本という字があるの？」

C1に見せながら、

C1“イ”の隣」

T「なるほど、“ほん”という字がある。他に何か気づいたことある人？」

・・・・・・・・・・一瞬の間

C2「あっ、この棒（“体”と“休”を交互に指差して）がこっちのところに……」

T「こっちの字とこっちの字の違いな」

C1「点（棒のこと）をつけているだけ」

C3「棒の数」

T「棒の数、棒一本こっちの方が多いけどな。」

T「で、この漢字はなんていう漢字だと思う？」

・・・・・・・・・・(悩んでいる)

T「まだ習ってない漢字でよね」

C2「イ木（いき）？」

T「これがイでこっちが木で「いき」だそうだ。」

C4「いや～、なんか違うような……」

C2「で、こっちがイ本（いほん）」 C4と発言がかぶる

T「こっちは、いほ？」

C2「違う、“いほん”」

T「いほん？なんだか韓国のスターのなんとかイホンみたいですけど」

Cnにっこり

T「いほん？」

C1聞き取れない

・・・・・・・・・・(ちょっと沈黙)

C4停滞気味の雰囲気足に動かす

T「今日始めてみた？」

C7「はじめてみた」

T「今日は、この漢字の秘密をさがそうということで、この漢字の読み方はなんなの？どんな意味があるの？この2つを君たちに考えて欲しいんです。どうでしょう？」

Cん「んー……」

一瞬の間

T 「むずかしい？」

T 「[難しそう？]

T 「あきらめるか」

C1 「う・うん」 首を横に振る

T 「まず、どっち（の漢字）から考えていく？」

C2 「あの、ほんって書いてある方」 指さしながら

T 「こっちの方から考えていく？」

C n 「はい」「はい」

C2 「こっちを解決して、そっちをする」

T 「こっち（体）を解決して、こっち（休）をする。それでいい？」

C n 「うん」

T 「今ねいいこと言ってくれた人がいる。この中に、この漢字（休）も始めてなんだけど、この漢字（体）も始めてなんだ」

C n 「はじめて」

C7 大きくなずく

T 「でも、この漢字（休）の中に知っている漢字があったということだったけど」

C1 「はい、木（き）」

T 「木という漢字が入っている」

T 「で、こっち（体）は・・・」

C2 「あっ、“お”が入っている」

T 「“お”？」

C2 机の上の紙に指をあてながら「お」とつぶやく

T 「“お”が入っている」

C1 「お？入ってないよ」

C n 「入ってない」

T 「あ、こういうことだな」 づくりの“木”の右側を指で隠しながらC2に確認する。Tは、カタカナの“オ”だと感じている。

C2 指をTの持っている紙に指差しながら「そこのブイーンとなってるの」

C1 「いや、消しても“お”にはならない」

T 「こう消すと“オ”になるんじゃない」（まだカタカナだと思っている）

C2 「違う、（Tの持っている紙を指差しながら大きく左手で上から下に）ビーって」

T （理解できないのでC2に説明させようと思う。紙をC2に渡して「説明して」

C2 「縦の棒を手でかくして、みんなの方に見せる」

T 「あっ、大きいっていう字か」

C1「あっ」

T「真ん中の棒、あつなるほどな」

Cn「すげー」

T「大きいという字が関係している」

C1「だからおお（大）に・・・関係ある」

T「あっ、大きいに関係していそうかどうか」

T「これは（休をもう一度指差して）？木は関係ありそう？」

・・・・・・（一瞬沈黙）

T「ん・ん・ん（笑）」

C1「大きいが関係あると思う」

T「じゃあ、これ（縦の棒）消して、大きいで解いていく」

Cn「うん・うん」多くが首を横にふる。C2も

T「違う？やっぱり“木”？」

T「木もヒントにする。」

C1「でも大もヒントになりそう・・・」

C2「大をヒントにする」(自分の発言を支持してくれるC1を見て意見を変えた)

T「じゃあね、この漢字（休）はわからないけど、知っている漢字は含まれているんだね。それをヒントにしてみよう。こっちは（体）、今C1くんが言ってくれたように、右のほう（つくり）は何て読む。」

C1「“本”ほん」

T「ほん？」

C2「よむ本」

T「あっ読む本のほん」

C4「一本二本のほん」

T「あっ一本、二本のほん。なるほどね、そういう本っていう字が入っているね。」

「こっち（休）は“木”、ま、大きいっていう字でもいいですね、こっち（体）は“本”という字が入っているよっていうことを頭に入れて、んじゃあ、この漢字の意味、読み方を二人で考えてもらいたいです。」

・・・・・・（一瞬沈黙）

T「最初は二人の考えを発表して、そのあとはみんなの発表から、解決していこうと思います。この紙（大きく漢字2文字書いている紙）いる？」

Cn「いる！」

T「じゃあ、この紙わたしますので、二人で・・・どんな読み方をする漢字なんだろうね」（紙を配る）

C2 はやっぱり、“大”にこだわって考えた。大（おお）とイで、“おおい”とホワイトボードに記入した。

C1 は、机に紙を横におき、漢字の下半分を封筒で隠している。前時の漢字の成り立ちの学習が効いているようだ。

T 「ストップ、ストップ。今二人で話したことを、みんなに発表して」

C2 「“おおい”に関係あるかも・・・これを（縦の棒）を抜かせば、大になるから、大んに関係あるかなと思って」

T 「大きいっていうことに関係ある。」

C n 「ううん？」怪訝そう。C2 も

T 「大きいっていうことに関係あると思う？」

・・・・・・（一瞬の間）

T 「じゃあ、これは（休）は何に関係ありそう？」

C1 「木」

T 「大きいと木だったら、どっちに関係すると思う？」

C n 「木」「木」

T 「木をヒントに考えてみような。」

T 「さっきこっち（へん）をイっていったけど、こっちは何かな～？」

T 「それを考えた人いる？」

C n 聞き取れない

T 「こっちって何なんだろう？」

C7 「にんべん？」

T 「にんべん？何、にんべんって」

C7 笑いながら、頭を大きく右に倒す

C1 「僕たち考えたんだけど・・・」

T 「あ、こっち（へん）の方な」

C1 紙を横にして、漢字の下半分を封筒で隠して「ええと、これは鳥かなあと思います。

なんかこうやってみると鳥に似ているから。よくここ（にんべんを横にたおしたところ）を見てみると、飛行機に似ているから、」

T 「鳥に似ている。どう？」

T 「漢字って、形からできたって勉強したよね。鳥に見えないかなあって考えたことだな。

T の話の最中、C3 と C4 はにんべんをなぞって、会話をしている。

気づいたTが「C4さん」

C4 「んー。この漢字、人っていう漢字に似ていると思います。」

C7「ほんとだ！」

T「人っていう漢字に似ている？」

全員が、紙を持ったり、紙に視線を写している。

C7は、にんべんを指でなぞっている。

T「いま、C4さんが言ったことに対してどう思う？」

・ ・ ・ ・ ・ ちょっと混沌した雰囲気

T「そうじゃないと思うのでもいいし、そうかなあと思うのでもいいし・・・」

・ ・ ・ ・ ・ しばし沈黙。停滞気味

T「今ね、こっち（へん）を考えているんだ。それはね今まで習っていた漢字のどれかなんだ。後ろにな（教室の後ろに習った漢字が張り出されている）最近習った漢字が貼ってあるんだけど、その中にな、似ている漢字がある。」

後ろの貼っている漢字を見る

C1「・・・」聞き取れない

T「C4ちゃんは人って言ったぞ」

T「C3は」

C3「僕も人だと思う」

T「他の人どう？他にも似ている漢字あるよっていう人いる？」

「んーん」・・・(沈黙)

T「これまで、人っていう漢字が似ているという人と、カタカナのイだっていう人がいるんだけど、どうだ？」

C4「でも、昔はカタカナできてなかった」

T「え？どういうこと？」

C1「カタカナは漢字よりも遅く出来たから、まだなかったっていいたいんだよ」

T「カタカナは漢字より遅く出来たから、カタカナのイと漢字の組み合わせは無
いってことなんだね。」

C1「うん」

T「実は、このイっていうのは、C4ちゃんが言ってくれたのが正解なの。これは人っていう漢字の意味がある。そして、さっきちらっと、C7くんが言ってくれたのあったよね。なんて言ってくれたか聞いてた？」

「え？」

T「C7くん覚えている？」

大きくうなずく。

T「何て言ったの？」

C7「にんべん」

T「にんべん」

Cn「にんべん？」

T「よく知っているな。このカタカナのイみたいを書いてあるのを、にんべんって言うの。今はな、そう詳しくわからなくても、そのうち出てきます。にんべんって言うの。よく知っているね。」

T「おにいちゃんから聞いた？」

C7「んー、3,4年生の掃除のときに、掛かっていた。」

T「3年生の教室にかかってあった。」

C7大きくなずく

T「いろいろね、覚えているなんてすごいな」

C1「たしかに」

T「C4ちゃんが言ってくれてね、ひとつ解決に近づきました。」

T「これ（にんべんを指差して）なんだっけ？」

C n 「ひと！」

T「人という漢字で考えてみる。こっち（休）は人と？」

C n 「木」

T「こっち（体）は、人と？」

C n 「本」

T「どっちから考えていく？」

・ ・ ・ ・ ・

T「うん。こっちは人と木、こっちは人と本ということから、この漢字の意味はなんだろうかなあとまた考えてください。」

再びペア学習

C2とC7の会話

C7「人が木を育てている」

C2「きりんだ」

C7「きりん？」

C2「これが顔で・・・これが足みたいで・・・」なぜか、ここに来て漢字の成り立ちにとらわれている。

C7「きりんが木のそばにいる。・・・でも字がわかんない」C7までキリンになった。

C7「成り立ちはわかったけど・・・」

（読み方がわからないということか）

C1がやっていたように封筒で、漢字を隠し始めた。

T「じゃあ、C4ちゃんたちのお話を聞いてみようか」

C3「ん-と。たぶんこの漢字は育てるっていう漢字だと思います。」

C2「おおお！」

C7「なんか、人が木を育てるとか」

自分たちが最初に考えたことに戻った。

T「他のことも考えた人」

C7「あっ、後ろ（体という漢字の方を指して）“読む”だと思う。」

T「ははは（笑）うしろは読む」（たぶん、休で考えていたのに、急に体がいったので苦笑い）

C2「読む！人がなんか、本を読んでいるみたいに」

T「あ、人が本を読んでいるみたいに」

C n 「育てると読む」

T「こっち（休）は育てる、こっちは（体）？」

C1「読む」

T「他にない？みんな育てるでいい？」

T「C5は最初はどう思った？」

C5「よくわかんなかった」

C1「あ？それとも・・・（体の本の横棒を指差して）これが鎌みたいで、木を切る人」

T「そっちは木じゃないよ」（Tとの思考のズレ、C1は木という漢字に、鎌が入っていることを指摘している）

T「（休むを指して）木を切る人か。木を切る人をなんと言う？」

C n 「キコリ」

C1「キコリあり得る」

C2「キコリ？」

T「あり得る。ん」

C2「あり得る」

C3「あり得ない」

T「あり得ない？」

え、はははと全体に笑顔

T「どうして、あり得ない？」

C3「わからないけど、あり得ない」

T「どうして？」

頭を横に振りながら、一呼吸おいてから

C3「これは別の漢字だと思う。キコリではないと思う僕は」

T「キコリではないと思う？」

C3「キコリではない」

C1「でも、わからないのに、キコリじゃないって決めつけるのは・・・」

T「決めつける（笑）まだ早いかな。なるほど（笑）」
C4「昔ってね、・・・燃料とかないから、・・・木とか切ってね・・・あったま
るのね。だからキコリっていう漢字だと思います。」
T「あっキコリっていう漢字に変更」
C4うなずく
T「C5くんはどう思う？」
C5「僕は最初は、人と木で分からなかったけど、C1くんやC4さんのを聞いて、僕はC1くんのがいいと思います。」
T「あーうーん。そう」
C2「キコリ」
T「じゃあ、ちょっとイメージしてな。人と木ってどっち大きい？」
C n「木」「木」「木」
T「木の方が大きいなあってイメージしてな。そしてその脇に、」
C2「人！」
T「人がその脇にいるな。この人ってどっち側向いているんだ？（笑）」
C n「こっち側」
T「こっち側ってどっちの？」
C1「木の方向」
C4「木の方向じゃないと思います。」
T「あっ、こっち側（木というつくりの方向）に向いているのか、こっち側（つ
くりとは反対方向）に向いているのか？」
T「どっち向いていると思う？」
C1「木と逆？」
T「木と逆見ていると思う人」
C4「ぐらいが挙手」
T「木の方向向いていると思う人」
挙手0
C4「先生・・・この・・・（聞き取れない）」でも周りの子どもには伝わってい
た
C n「あ、ああ」
C7紙を持ち上げて、にんべんをなぞっている。
C4「なんかね、にんべんのここ（つけとめのところ）が頭で外向いているの」
C1「あ、僕ね確率低いと思うけど。」
T「確率低い・・・（笑）はいどうぞ」
C1「これは（つけとめのところ）鎌をあらわして、木のところ・・・」やはり
キコリにこだわっている

C3「あり得ない」このことばにこだわっているのか

C4「鎌だったら、こっち（木とは反対側）をむいてないでしょ。鎌だったらね、木に向かって切るし・・・」

T「じゃあ、ヒント教えちゃうぞ、それとも自分たちで考える？」

C n ぼつりと「聞く」

T「じゃあ、最初に読み方教えちゃうぞ。これね、この文字だけじゃなくて下にひらがなを付け足して読みます。」

黒板に「休む」と板書

C n 「すむ」

C7「かむ？」

T「木と人がいるのを予想して」

C4「あっ人が木の中にすむ」

C1「あ僕言いたかった」

T「人が木の中に入っちゃったか（笑）」

C1「木をいろいろ利用して作ったところに・・・」

C7「住む」

C n 「住む」

T「人は木より小さくして行ってね」紙ににんべんを小さくとなり木を大きく書いて

C n 「あ、わかった！」

C n 「人は木の中に住んでいる」

T「住んでいる（笑）」

C2「人が作った家の中に入ろうとしている」

T「ははは、なるほどなあ」

C7「あ、人が作った家に住んでいる」

T「はははは、住むかあ・・・なるほどなあって思うんだけど残念ながら住むじゃなんだよな。もし、君たちが昔の人だったら、この字は住むになったと思うけど、これは住むじゃないんだよな」

C n 「なんだろう？」

T「木のわきにいるんだよ。はははは（笑）」

C n 「見る？」

T「見る？」

C n 「読む？」

T「じゃあな、ちょっと待つてね。住むじゃなくて」

C5「休む」

C7「あ！」机に突っ伏す。（当てられたとがっかり）

C n 「あ、わかった！やすむだ！木の休むところに休んでいる」
T 「ある辞典から、とってきた（イラスト）こんな絵をイメージして昔の人は作ったといわれているんだけど、さあこの字はなんだ？」
C n 「あああ」
C n 「休む」
C 2 「わかった！木に木に休んでいる」
C 4 「人がなんか木のしたで休んでいる。」
C 7 「わかった。人がなんか走ってきてちょうど木があったからそこに背もたれをして休んでいる。」
C 2 「わかった。暑いとおもったらその、そのぼさぼさが陰になるから。」
C 3 「はい。この人は多分、暑いと思って日陰を探して木が日陰になっているから、その様子を見て、昔の人は休むと読んだのだと思います。」
C n 「休むだ、これ！」
T 「これね休むという漢字なんです。この漢字は休むでOK」
C n 「Ok」
T 「言われてみれば、この漢字休むだと思う。じゃあねコナンから出された課題を一つクリアしたんだけどもうひとつ……」
・ ・ ・ ・ ・ (以下省略)

(参観者の議論より)

- ・ 小学1年生には見えない、3年生くらいだと思った。
- ・ 3年生の教室でみつけたことなどを話をしているのは驚いた。教室環境も子どもにとっては相当に影響している。
- ・ 子どもが本当につながっている。ただ最初はこうではなかった、入学当初は、席について授業を受けるのも大変だったが、夏を過ぎてだんだんこのようなクラスに変わってきた。(笹原さんは、この当時の校長だったことから)
- ・ 保護者との信頼を得るために、たよりをほぼ毎日書いた。保護者の信頼が得られてくると子どもも変わってきた感じ(保科さん)
- ・ 「休(やすむ)」とよむことがわかった後から、いろいろな休むの状況を発表しあっていたのが面白かった。「走ってきて木陰で休んでいる」等。

森田先生から

- ・ 子ども達の落ち着きを支えたもの=子どもの探求の連続でできていること
- ・ 漢字の成り立ちという教材をどのように考えるかを子どもが投げかけている
- ・ ・ つくり

- ・ 象形文字
- ・ 訓読み（やまとことば）
- この3つの出会いを子どもは行っていた。音（イと大の解釈）で始まり→形（漢字を横にして図としてみていた）→へんとつくりを音で読んでいた・・・やまとことばについて触れていた。
- ・ 漢字の成り立ちを子どもたちが辿った授業だと思った。
- ・ 低学年では、論理的なものほど、教材研究が必要

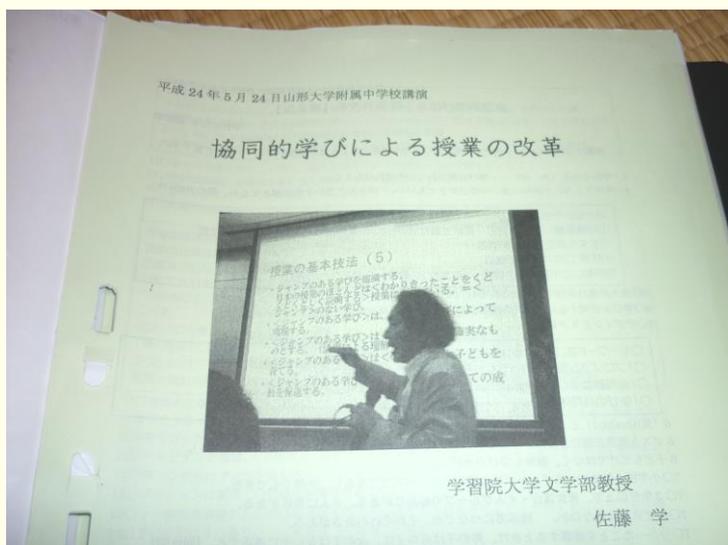
Q コの字での授業だったが、今その学校はコの字が解消されている

- ・ →コの字が形骸化するの、授業づくりの問題ではない。子どもの学びを保障するというミッションからコの字が生まれてくる。だから、学びが保障できればコの字にこだわらなくてもよい。

Q 学校が安定しているという発言について

- ・ →『安定』という言葉がでることに違和感を感じる。それは、学校は問題がないほうがよいという感覚。学校は波があるという解釈がそこにある。
- ・ 問題があるだろうがないだろうが、子どもをみているかどうかの問題

丹さんが、山大附属での佐藤学先生の講演の様子を冊子にまとめてくれました。もし、ご覧になりたいかたは、私も数部もっておりますが、丹さんまでお問い合わせください。





[戻る](#)